便利さの本質

野生動物学研究室教授　高槻 成紀

大学院生だった頃、研究室の先生と登山したことがある。東北地方の 2000m 級の山だった。先生といっても 30 歳代の若い人で、大学院生にとっては「兄貴」的な存在だった。いわゆる有名な高山植物はだいたい覚えていたが、それでも知らない植物のほうがはるかに多かった。その先生にたくさん教えてもらった。同じ植物を二度ならまだしも、三度聞いたときはさすがに申し訳なかったが、いつも快く教えていただいた。そうしたことは研究室の伝統のようになっていて、私も若い人に動植物の名前を聞かれたら気持ちよく答えるようにしている。

山小屋に 2 泊くらいしたとき、尾根伝いに歩いていた。その先生もわからない植物があった。わからないといっても全然見当がつかないのではなく、似た種が２，３あってそのどれかが区別できないということだった。図鑑には検索表がある。たとえば花の構造の一部がある種と別の種でどう違うかが記述されている。あまりにたくさんの植物があるので、パンクしそうになった私は

「もし強力な無線があって、研究室に電話ができたら、図鑑の検索を聞けていいですよね」と言った。先生はなにを馬鹿なことを言っているといいたげば表情で笑った。私も自分の発言を馬鹿げていると思いながら口にしたのだった。

私が電話といわずに無線といったのは、シカの調査などでトランシーバーを使った経験があったからだ。携帯電話が普及するはるか前のことだ。

だが、時代は変わり、荒唐無稽に響いた私のことばは現実味を帯びてきた。富士山で滑落事故を起こした人が携帯電話で交信して命拾いしたという報道があり、これはすごい武器が出現したと思った。その携帯電話の質の向上は周知の通りである（というより私はほとんど把握していない)。研究室に電話することはむろんできるし、それだけでなく辞書や図鑑情報を山で引き出すことは十分可能になっている。

携帯電話にはデジカメ機能がつき、GPS 機能さえつくようになった。うわさによれば、町にタッチパネルのようなものをたくさん置いて、自分がどこにいるとか、行きたい店をすぐに調べることができるようになる日も遠くないという。

十年以上前になるがネパールヒマラヤを歩いたことがある。上下移動のあるきびしい山行であった。道路が二股に分かれているときは緊張する。もしまちがえて登るべきところを下ってしまったら、半日で数百メートル、場合によっては千メートル以上も登り直さなければならなくなるからだ。そうした分岐点では同行のシェルパが地面をじっくり観察し、「こっち」と指さす。先にいったシェルパが石を動かしていたり、足跡を読んで判断するらしい。私にはまったくわからなかったが、彼らの判断がまちがったことは一度もなかった。私は自分の感覚の鈍さを痛感した。

モンゴルのゴビ地方に行ったことがある。まだモンゴルの調査を始めて 2 回目の調査行

だった。ある場所で車を走らせていたとき、モンゴル研究者が「ガソリンが足りなくなるといけないから隣の町までガソリンを入れに行く」という。その日、すでに 6，7 時間も車に乗っていたろうか。「隣の町」といっても数十キロはある。また車に乗るのはうんざりだったし、なによりその場所には見たこともない植物がたくさん花を咲かせている。

「写真でも撮っているから、置いていって」

私はそういって一人その場所に残り、2 台の車は草原を走って小さくなった。ひととおり写真を撮った私は、その静けさに気づいた。ハチの羽音さえ、大きく聞こえる。周りを見ると 360 度地平線であり、さえぎるものは何もない。太陽は真上にあり、自分の陰は真下にしかない。水筒はもっていたものの、私はちょっと不安になった。

小一時間も経ったろうか。私の不安はちょっと大きくなってきた。もちろん車も走らなければ人影はまったくない。もし彼らが戻って来なかったらどうなるだろう。ひと晩はなんとかなるだろうが、明日になっても戻ってこなかったらまずい。

「この真っ平らな場所にどうしてもどって来るのだろう？」

不安は大きくなってきた。それでも根が楽観的にできている私は地面に横になり、帽子を顔にかぶせて昼寝をしようとした。だが、暑いし、まぶしいしので眠れたものではない。少し水を飲んだ。

2 時間近く経って自動車の影が目に入ったときは大きく安堵した。モンゴル人はつねに方位がわかっている。我々に真っ平らに見える平原も微妙な起伏があり、それらを読みながら場所を定位するようだ。私は自分の感覚がモンゴル人にはるかに劣っていることを実感した。

私たちの社会は便利さを追究する。便利になればプラスのことがたくさんあるが、その便利さで失われるものが確実にある。私たちはヒトとしてもっているはずの、微妙な情報から別の人のしたことを読み取る能力を失っているし、方位や位置を知る能力を発揮できなくなっている。植物の名前を山で確認できるようになったことはまことに便利だが、山に行く前に図鑑をみて、植物の特徴を頭にたたきこむ努力をしなくなってしまった。問題は植物の区別をできるかできないかではなく、外からの情報を利用することに依存的になっているということだ。スーパーのレジの人はごく簡単な引き算もできなくなっている。今の若者は携帯の情報検索なしに時刻表を使った経験はあるだろうか。こうしたことは一種の依存症といえるだろう。

私の懸念は、脳がまだみずみずしい若いときに、こうした便利な機器に依存してしまうことがどういう影響をもっているかがわかっていないまま、その依存がおそるべき勢いで進んでいることだ。携帯がなくてもできる程度の可能性を残しておかなければ、生物としてのヒトのあるべき状態に戻れなくなる危険性があると思う。

町にIT機器を配置しようとする人は技術進歩という点で能力のある人なのだと思うし、そういう能力を利用しようとして金儲けに興味がある人が群がるであろうが、その種の人々は人間にとって大切なものが何であるかについて考える能力が欠けていると思う。そうした人々が社会を動かす時代にいあわせたことは、楽観的な私にしては哀しいと思うことだ。